

～第3回会議講演より：壁を壊し、まちの風景を取り戻す～

(第3回太田市自分ごと化会議では、社会福祉法人愛川舜寿会の馬場拓也氏をナビゲーターに迎え、これからの地域共生社会のあり方について講演が行われました。以下に、その講演内容をまとめました。)

お囃子の音が鳴り響く盆踊りの櫓(やぐら)の周りを、外国籍の人々や車椅子の高齢者、障がいのある人が一緒になって囲んでいる。リクライニング車椅子のおばあちゃんが、一口ずつカキ氷を食べさせてもらう姿を、それを見つめる近所の小学生。馬場氏は、両親が経営する高齢者施設で目にしたこの光景に「これぞリアルなダイバーシティだ」と衝撃を受けたという。

現代社会は、効率や安全を免罪符にして、高齢者や障がい者を施設という「壁」の向こう側に隠してしまった。しかし、馬場氏は内部の猛反発を押し切り、特別養護老人ホームを囲む壁を取り払って、庭を地域に開放した。すると、庭先でタバコを吸うおばあちゃんと、通りがかりの中学生との間に「おはよう」「いってらっしゃい」という毎日の挨拶が生まれたのだ。そんな毎日を重ねた中学生は後に、「社会福祉士になる」という目標をもって大学へ進学したという。福祉が隔離されたものではなく、「まちの風景」になった瞬間である。



▲馬場氏による講演の様子

壁を壊す決断の背景には、2016年の相模原市障害者施設殺傷事件への強い危機感があった。命の価値を生産性で測ろうとする思想が社会の底流に存在する限り、福祉が隔離されたままであってはならない。認知症になっても、障がいがあっても、地域の中で当たり前のように生きる姿を、まちの風景として可視化していく必要があったのだ。

馬場氏の挑戦は止まらない。閉店した地域のスーパー跡地を改装し、認知症の高齢者、障がい児、そしてコインランドリーやコロッケ屋を利用する地域住民が自然に行き交う複合拠点「春日台センターセンター」を立ち上げた。かつて家庭や地域共同体の中にあつた子育てや介護といった「ケア」は、今や外部施設へとアウトソーシングされた。時代を巻き戻すことはできない。だからこそ、これからの時代はその先にある場所を、血縁を超えた「もう一つの家族」のような関係へと育てていく必要があるのだと馬場氏は語る。

人間は共鳴する動物であり、共に食を囲むことで他者と分かり合ってきた。誰もがいつかは老い、誰かのケアを必要とする。分断された社会で私たちが再び手をつなぐためには、まず自分の中にある「心の壁」を壊し、多様な人々が混ざり合う風景を、まちに取り戻すことから始めなければならない。